

# 熟議への期待

2012年3月3日(土)に「熟議 2012 in 香川大学」を、香川大学研究交流棟5階研究者交流スペースにおいて実施した。メインテーマを「地域とともに歩む大学づくり～香川大学の人材育成機能への期待を問う～」と設定した。熟議そのものへの参加者はおよそ90名、学外参観者がおよそ20名、学内スタッフ20名の総勢130名が会場を埋め、活気ある議論の場となった。長尾省吾香川大学長、合田隆史文部科学省生涯学習政策局長、平林正吉同生涯学習振興課長が主催者として、その熟議を終始参観し、最終的な提言を受けて講評するなど、会場は一体感あふれるものであった。本報告では、その熟議の様々とともに、その成果と課題についてまとめたい。



(会場の香川大学研究交流棟)



(熟議開会前の緊張に包まれた会場)



(長尾香川大学長歓迎の言葉)

熟議の開催にあたっては、地域の要請に向き合う香川大学となるために、多様な主体が議論に参加する熟議の手法を用いて、香川大学の新しい未来像を形づくることを目指した。

香川大学は、地方に位置する国立大学法人として、地域密着型・地域貢献型の大学であることを目指している。一般的には文理バランスの良い大学としてとらえられる本学であるが、その実態(資源)が地元香川県民に十分に知られているとは言い難い。

本学は、地方国立大学として、社会の要請に応える有用な人材を育成し、輩出するという役割を担っている。香川大学憲章前文の中で私たちは、「個性と競争力を持つ『地域に根ざした学生中心の大学』」を標榜し、「世界水準の教育研究活動により、創造的で人間性豊かな専門職業人・研究者を育成」することを宣言している。また、社会に貢献する大学として、「社会が抱える課題に対応した実践的提言」を行える機関、「地域医療の中核機関」、「知識基盤社会における学習拠点」となることで、地域の文化・産業・医療・生涯学習などの振興に寄与する、と宣言している。この香川大学憲章をよりどころに、今回の熟議を企画立案した。

## ＜熟議のテーマ一覧＞

- ①：地域の高度な学びを支える大学となるように  
大学には公開講座や講演会、企画展等の広く地域の方が学べる機会があります。社会人向けの大学院や夜間主コースなどの学位プログラムも準備されています。
- ②地域で活躍する企業人を育てる大学となるように  
6学部と9研究科(大学院)において、特色ある専門教育を行っています。キャリア支援センターにおいても職業指導・就職支援に取り組んでいます。
- ③責任感あふれる教員・公務員・医療福祉従事者を育てる大学となるように  
教育学部や医学部では教育・医療・福祉で活躍する人材を育成しています。公務員を志望する学生も近年増加しており、セミナー等の開催をしています。
- ④夢を語り、叶えられる大学となるように  
全国から数多くの学生が入学しています。学生は授業で学ぶほかに、ゼミ活動、サークル活動、ボランティア活動等から多くのことを学びとっています。

①は生涯学習社会における大学の役割、②は産業・経済界へ人材を輩出する大学の役割、③は公共をキーワードに学校教育・地方行政・地域医療・地域福祉に人材を送り出す大学の役割、④は高校生・高校教員のもつ大学への期待、を語っていただくという意図である。このことは、単に香川大学の未来像を描いていただくだけでなく、広く日本の高等教育機関のあるべき姿を描き出すことにもつながる議論になるのではないかと考えた。

# 熟議の成果・提言発表(1)

第1セッションおよび第2セッションを経て、各グループから発表されたユニークな「提言」を以下報告する。すべてのグループで熱のこもった熟議がなされたが、紙幅の都合で特色ある提言を中心に取りあげていく。



(提言内容を分析する合田局長と平林課長)



(提言に耳を傾け、香川大学の将来を考える長尾学長)

## ☆テーマ①について熟議したグループ

- 提言1 地域への情報発信強化に向けて県・市町と“交換広報”を行う。
- 提言2 地域の人が気軽に通える大学になるために県民大学登録制度を作る。
- 提言3 地域でかがやく人材を育てるために学生の地域活動の単位認定を拡大する。



どの組織も共通しているが、どんなに素晴らしい取組があってもそれが社会的な認知を必ずしも得ていないという状況がある。また、組織内に見えないことが、発想の違う外の意見を聞くと、ぱっと霧が晴れるように見えてくることもある。行政職員が中心となったこのグループでは、自分の所属する組織のことを常に思い描きながら議論が進んでいった。

香川大学でも、他大学や地域に誇れる数々の取組があるが、どこまで地域に届いているのか心許ない。そこで提言1は「広報の強化」をあげている。これはかなり実現可能性の高いものではないだろうか。

大学も地方自治体も広報誌をもっているのだから、大学から地域へ広報したいことを県・市町の広報誌に掲載してもらい、また地域から大学に広報したいことを、大学の広報誌に掲載する。この交換広報を通して情報共有ができ、相乗効果が生まれる。

提言2は、大学を県民がさらに利用しやすくする提案である。誰でも香川大学への学生登録をするだけで、垣根が低く学ぶチャンスにアクセスできるというものである。授業料の問題や単位認定、学位授与等のさまざまな課題は考えられるが、地域とともに歩む大学づくりの方向性に照らし合わせると検討の価値はあるだろう。

提言3は、学生の力は地域の活性化につながる。また、学生は地域の中でさまざまな学びを達成することができる。本来は学生の自発的な地域活動が望ましいが、そこに導き入れるために単位化することを検討してはどうか。(この提言については一部実現した。)





# 熟議の成果・提言発表（2）

☆テーマ②について熟議した2グループ

- 提言1 ミスマッチ解消 四国八十八箇所 中小企業巡り
- 提言2 長期インターンシップ in 企業 or NPO
- 提言3 学生と大学が共に地域への関心を高められる学習機会をつくる
- 提言4 大学・企業間を自由に行き来できる学びシステムが欲しい

よき企業人となるためには座学だけでなく、地域との接点を持ち、自分自身を育てていくことが大事である。企業の第一線で働く人と大学生が中心となったこれらのグループでは、企業が期待する人材像と大学生の現実とをぶつけ合い、そこから何かを見つけようとしていた。

提言1では、お遍路にちなんで、大学が提示した88箇所の中小企業を巡ることで、地域のために頑張っている中小企業の実態を知り、就職への動機付けを行う。提言2では、大学生のうちに働くことの意義をもっと知るべきなので、そのための長期インターンシップを提案する。「働く」という意味では、企業だけでなくNPO法人も対象とすべきであろう。

地域をよく知ることによってのみ、地域の特性を生かして活躍できる人が育つ。提言3は、大学教育は正課・正課外を問わず、地域での学習機会の充実を図る必要がある。学生も地域の中で自主的な学びの場を作るなどの努力が必要である。

提言4は、大学と企業の間をある程度自由に行き来できるシステムが必要ではないかということである。企業人となってから学びたい大学の授業もある。一般の人、高校生も大学がどのようなところか知る場を設けて欲しい。そのための学びシステムが欲しい。



☆テーマ③について熟議した2グループ

- 提言1 香大生と地域との協働による熟議の開催
- 提言2 ボランティア活動に参加し、地域の人からフィードバックを得る中で、大学のイメージアップを図り、香大生としてのプライドを持つ！！
- 提言3 すべてが先生プロジェクト 垣根を越えた交流 先輩—後輩 地域—大学

情報は待っていてもやっけてはこない。情報を得るためには、学生自らが行動しなければならない。しかしながら、そこに必然性がないと学生は動けないのが実態である。さて、学生がそれを感じるためには、このような熟議の手法は有効である。学生の主催する熟議の開催が地域を巻き込んで行われればよいと考え、提言1を考えた。学生が積極的に地域の人を大学に招き入れて、さまざまな課題について議論できれば、地域の活性化に向けた主体的な一歩が踏み出せるのではないか。



# 熟議の成果・提言発表（3）

大学と地域との間にある垣根を乗り越える必要がある。学生にとって地域とは「先輩」にあたるもので、多くのことを学ぶことができる「先生」に他ならない。そこで、提言2は、地域へのボランティア活動への参加によって、大学のイメージアップにつながると同時に巡り巡ってそれは自分たちに返ってくることを実感してもらいたい。香大生としてのプライドが生まれることも大事である。提言3は、文字通り「地域は先生」という思いで地域に関われば、学びも増すということである。学生の学びの多元化が求められている。

☆テーマ④について熟議した6グループ

- 提言1 学生による大学PR（パンフレット・DVD・ホームページ・グッズ）
- 提言2 高校生が知りたい情報が掲載された情報誌
- 提言3 学生自らが地域と大学を結ぶコーディネーターになる
- 提言4 「Challenge なんでも受付所」をつくろう！！

テーマ④について熟議したグループは、メンバーに高校生や大学生が多く入り、そこにさまざまな大人が加わって構成されていた。そのため、できるだけ若者の意見を活かしながら、提言に結びつけようとしていた。

提言1は、学生の欲しい情報が不足していることを受けて、必要な情報を学生の視点で発信することが有効であると考えた。自らが作成に関わることにより、香川大学に対する母校愛・誇りをもつことができる。それに関連するのが提言2であり、現在の香川大学の情報誌は、大学側が自己アピールの場として作成されており、学生や高校生の知りたい情報が少ないと感じられている。そこで、学生が今知りたい質問を集めて、それに答える情報誌を作成することで、大学の魅力が増し志望者も増え、結果としていい大学づくりにつながると考えた。

提言3は、学生に必要な能力のひとつとして「コーディネーター」を位置づけて、これまで以上にその能力を身につける必要があるであろうということであった。そこで「地域の期待」と「大学の資源」の両方を調整しつつ結びつけることで、実は地域と大学との関係の特殊性ではなく、世の中のあり方はまさに思いの異なる主体をどのようにつないでいくことが、よりよい社会づくりになるのかを考えることができるのである。提言4は学生の意欲を引き出せる仕組みを大学につくって欲しいというものである。



大学に求めるものは何だろうと考えた結果、「夢を見つける場」というのが共通するものであった。「将来に向けての勉強をしやすい環境」とはさまざまな学びの機会（チャンス）であった。学生には、入学にあたって夢や希望があったはずである。思いつきも含めたその発想が実現できる大学となるためには、学生自身を巻き込んだ一工夫が必要であろう。